



184
1833
41



繪本右衛門記に篇卷之五

目録

- 先秀まひで落命おちひ於小栗おぐり栖野せの話こと
- 三宅みやけ屋や去さ湯ゆ先秀まひでが生なま害がいを止とどるむ圖ず
- 一揆いぎ系けい落人おちひとを討うんと戮ころすむ圖ず
- 中村なかむら長なが去さ湯ゆ園えん又また先秀まひでを突つくむ圖ず
- 先秀まひで小栗おぐり栖野せのとて落命おちひの圖ず
- 先慶まへけい病やまひ死し并なら治ち右湯みぎゆ門かど先忠まへただ自みづか害がい話こと



溝尾庄兵清自害の圖

甲村長吉清光秀を従の着を秀吉御執る圖

明智左馬次出渡合戦話

林本に即勇戦討死の圖

左馬次馬を以て湖水を涉る圖

其二

左馬次馬而涉湖水話

左馬次唐修より坂本の城に入圖

繪本左圖記に篇卷之八

光秀落命於小栗栖野

夫軍の討の運より且大なる心は在るといふも今知後内務公が諫
^まつた光秀系安を捨く明智左馬次は十郎左衛門が多勢又子余
^んを坂本に籠城せし其身は丹及龜山に措籠一團を固く飲
^し耐節を伺ふのなるべし城も兵糧乏乏山に之を素軍者乃
^ら光秀の光秀は小大軍とて来りも豈容易に城せんや三年もこ
^らんらんを圍はた大軍は敵方心より分離と長し猶らば論天下を掌
^握せざるも十ヶ圍十ヶ圍を切きて止るは耐運とハナナナ
^げは坂本之根も日向光秀は部下の海ありて心ならずは
^龍舟の城は為籠り上下の兵八百人を初に戦はくはて後切





三宅茂兵衛
生官を
ゆるる
図

真島三宅茂兵衛巻五

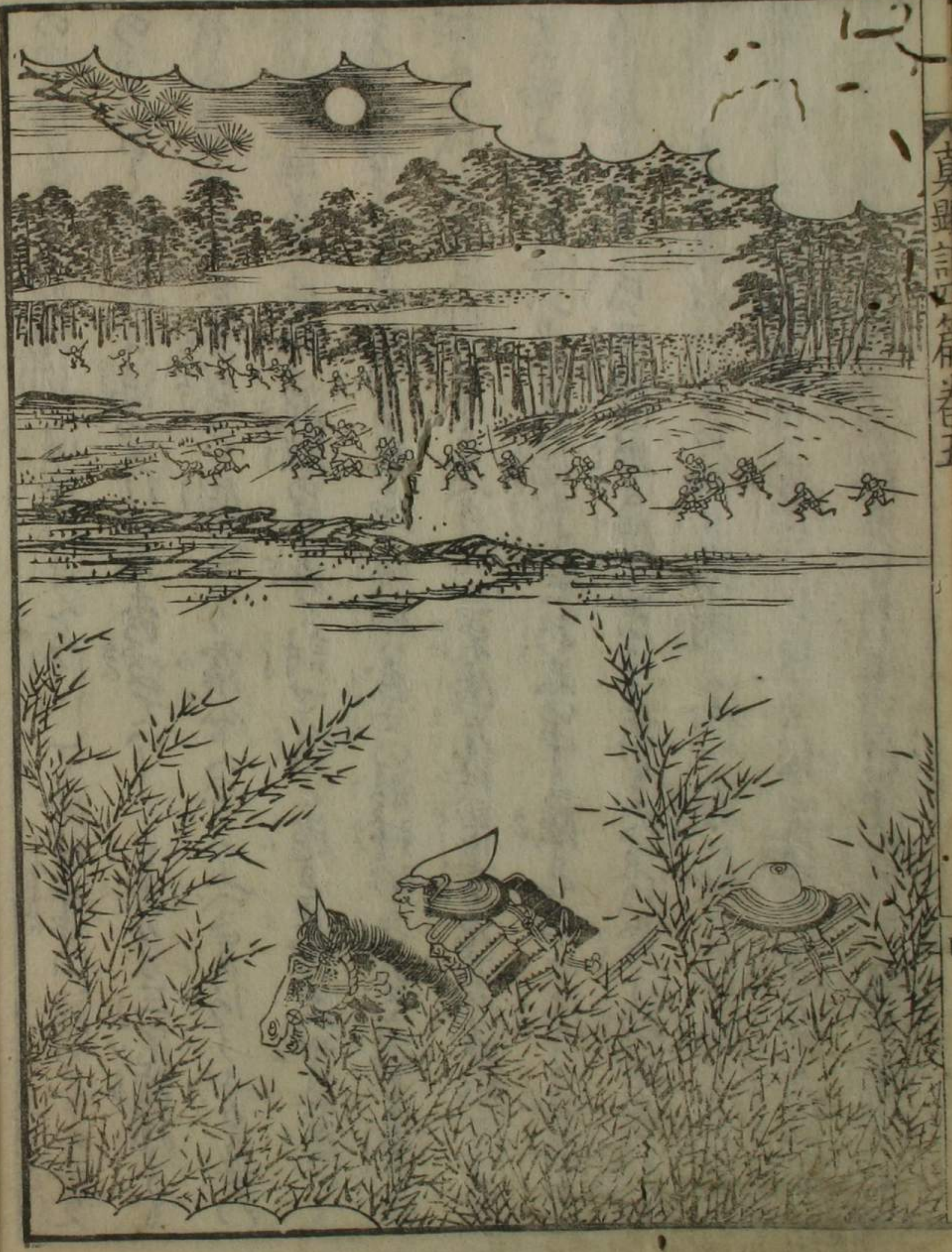
思ひ定めて「」に城代三宅兵衛總持討ちて上なる九軍の首領
 ら著い先命と憐と釋と附運を計り必勝の謀略を以て三日の
 以君と爲の二戦は打負されしとて切腹「」後平治のやけは三龜山に在り
 先攻を及を去りしに後援兵隊又百余人今在城でり坂中平
 其屋所を始り集りて長雨を城代としし金石の勇士八百余人勢城以
 妻去に勇龍馬故先妻又子余人長溪は妻本を計既阿困万又即一子
 余人仁和山は荒本を子八百余人其外京都三宅武部は番隊大炊
 既伏見に池田織部宗治に奥田庄をまゝ悉くみ二子の軍率あり味方
 の軍兵集ありて二万三三よりこれに龍馬故妻本荒本等を取つて
 城とせ若し溝尾法田進士は田舎に具く龜を擲籠天下の憂を
 見合せ強し「」鬼神のおこくる人の世に信長を討つとて文討をり系断

の守護して方或は備仰せ進御身を將しく御生害は「」終つんと先覺
 のゆい候と候と候と流めたり先妻あていれりもや三宅城はとも
 秋尚月二日信長を御つと報せしより露令なるふきより身
 今朝山崎表の合戦は股肱の良多く討せ寔と逃るまは心落く
 是より物をとりて逃れし龜は後約の武士の振擲けとのみきやと力の
 柄も成りけ既又自害と刃とく三宅溝尾法田進士左右のよんごり
 是は物も程ひ強なりゆる原形新にお来の中は既と居て逃れ海内を
 りに極きする氏に西海の波は漂ひるがも天に爪を掌り収りて岸附
 りよく寔を逃れりて御運を捕らんとて或は怒り或は恨みとてまぐ
 勅を傳りしとれ先妻も又悲しごとく口人を御小座ひて「」先坂中へ逃れ
 一七と定めて三宅兵衛兵隊大炊は其身の中は其後守並河八女



一揆原
落人を
討つ

真田記



真田記



中村長五郎
 晴久光秀と
 宴く國



真田記の御巻五

三人三所計 為郎が先秀馬よりかきと落し溝尾庄兵衛其後
 此馬より飛りていふいと勢あり先秀溝尾が女とたてて其希の槍
 勝の出るは難しめくのおとら痛むに中へ板へ入らん叶べく
 も是に定めて切腹とまきる首瓜妙心寺へ持参して捨ぬんとす
 體の引合せより紙と辞世の書する瓜を切し庄兵衛は後と其の
 又曰く

逆順 五二門

大道 徹心 源

又十又年 後

光素 障 一元

明窓 玄智 居士 書

先秀 服差を扱て扱十文字又搔切は溝尾庄兵衛 涙ながり首
 打落し三つ其の二進士他在溝尾庄兵衛 門は回布刀一扱をて廻らじ 後



先秀
 小栗 栢
 命の 國

馳せぬ来りけ侍をんそく大は驚き我け奉月龍鱗よ付て身を三巻
 を世よの知し進の真志の若懸いゆりて報とさや暫く待せ給座伏
 伏せんと進出光秀が自害しつる服指爪をく心えに突立れば田首ら
 首を撞落し人とも光秀が死骸を抱き付て死うらう溝尾も一所
 ほど思ふも歎まむ人首とをさるるもいふれば田進士が面の皮と削りま
 君の首爪馬糞に包し山賊は狼谷とらふ不と急ぎさるるいけ迎よ一揆さ
 光秀と通る人さ中うあざれい山の隙を埋ま退し今い後世
 思ひあふは自害してま君の恩を報せむとぞ思ひらるふ溝尾が妻履
 えよと七郎とら者只一人は死幕して其不意の来りけい首のものと
 妻子の方へ送りけしといふと後接切て死にうらう附は揆をうけしを襲ひ
 奉らば七郎と人の首と隠れ三回もたう其身計漸岩根を傳ひ山

林を渡り故郷こそいふ所なり

光秀病死希 活右清門光忠自害

小栗栖村の百姓中村長兵衛光秀が死骸首を改めりうらうは
 の中より心く我実ぬりし騎馬武者たりうらうは根をひて括板の
 板の合板板付うらう板の板の板光秀とて中しやう首と隠せしこそ
 五志ありしと方く腹求るなりは溝尾店兵衛が死骸をひて首を
 えくは光秀が首を求むる中の中は足流ありまを去りてゆりて
 列りらるふとさしうらうは何換物を埋めし侍たりけりて板の
 光秀の首は板に包れり馬糞に包し光秀が首は長兵衛大とら
 光秀溝尾等の首十一秀吉及の本陣(持味)実候はゆりけりまが
 つき光秀の首はうらう秀吉とてうらうは軍扇をひて彼首とて

真領日記



真顯言四編卷五



溝尾兵衛
白殺之圖

真顯言四編卷五

九



中村長兵衛
 先年白浪の
 首を奪る者
 御
 秋の國



と打君成殺せし 天罰又く来て去民のふに令と為せし 怪き我の罵
 終ふ彼長兵清のい若令殺多揚り其の柄を祿原に終ふ今も依見の里
 には長兵清の孫のといふ此時光秀の弟又十八歳構尾兵清に十
 三歳進士他九歳門に十八歳比田若刀に十六歳之末は長之なる光秀
 が嫡子十兵衛尉光秀今十年十歳なり多う多うが若弟勝多う若弟勝
 うし去る卯月の始より龜山の城をて用思地は好いしが後より争き
 とあり京都より名医殺多拓原若換く藤治方也程は少い岐争乃
 争多かりしは四月二日光秀京都して信長をを殺送討交帝都又
 旗を立天下の執権せりは少くより光秀入好い階を疾病次第に争
 り終て日十三日の夜光秀小栗栖して生害し向對龜山の城中にて終
 り遂く死りたるこそ不思議に事わりたり光秀の後見隠岐又即兵清

惟願い主君の死去を歎き悲し其座に後撥切の年又十一歳して殉
 死して是の早なる死るふけ日と禱の合我彼は光秀討死のよしを鳴り
 て世上發りりい龜山の城はなる事本七右衛門航之内は三右衛門忠次
 主人の死體希し惟願が死し諸人もよゆ地中又埋し其後始とをひ
 信り如主人の死体吊ひる彼晋の縁讓を度して四君の怒と被し
 なるい似ざしとも妻てのりて是へ表は之を後又十日日の曙光秀の下
 知して骨舟吹焚を大おして降屋出羽守中河勢平堀川狗若やる山
 右近も三万三人勝龍寺の城に十を廿を又多を録波を揚り多付
 城は三宅後兵清朝並て期にうるるいい並河八段中河勢後を三
 千人討て出く落死燧塵を我い考ふ八十余人討て二百余人ふと謀
 味方も百又十余人討死城は入く忽火をうけ三おりも自害して勝龍

寺の城は落しうたり三宅及兵衛に十三歳と丹及八上の城を日向が経
明智右衛門光忠は去る六月二日素素は旗炮の中を源平の兵を
知恩院へ入る治藤に兵を修表の級徒向州の城を安守佐佐木
即成次郎友田三郎を丹波國へ退き給へ執心光忠完介と義入
誰ための名うれば身より暗むん墓なきものも武士の石
とる言款を繰りて吟ぐつに十三歳はて十日の朝知恩院にて自
殺し三人の家臣候と傳へ其屍を収め心くよ海終り

明智右馬友打出渡合戦

去後、明智右馬友光忠は六月十日降参の兵二百余人は及去の城より打
入より以素國と懐けに及平均一國を治んと稱し又思慮を白じ
居る十三日山崎の合戦味方放逐しては苗十郎右衛門を始り通河山

本後訪妻本奥田毎及此本田三牧友田等の勇士等討逐し刻し小栗栖野
あり大光秀希は溝尾進士法田等自殺せしははれ安去の城下より
發働し羽柴が兵士は押来りはとまぐははれ龍馬友思ひひるる
安去を獲り大死せんよう坂本の城へ入る向州が妻は城代長雨發等と
安去をくもにせしははれ又遠りあは京都は悲ひよう秀右衛門討死
二つの内はあし思案を極め諸方の集り勢は悉く勝を却り丹波勢は
余人十日辰魁安去の城より火をうけ一行の烟は且佐和山の麓本心城守
長崎の妻本を計取人へ復を立寄り其城を捨て坂本へ一平氏籠り
ははれ中進出に坂本へ急ぎたるは羽柴本城を告げ知はれは是
角又即右衛門の計多し入秘城体を即ち二万の余人安去と坂本と心
は一系に安去たる龍馬友の道平は余人を急ぎたるははれ佐和山



林平に即
討死
の圖

真頭記四篇卷五

十四



真頭記四篇卷五

十三

本儀其家の宰人村武世等家二百七百餘名を率ひて又百人を
遣り通じ物をとまへしに在馬女等もせし引返して討殺しお
破りぬる纏ありんぐも我ひく打出の浪もせし討子余人の軍兵
討りて大と勝の愛は心まよひ居初者もあつた今石川重虎即ち
村法右衛門法回玄審州川新八右田重右衛門三宅修八系右衛門初
見左衛門林守に即荒本交之惣本八之惣等惣二百余人餘り
急ぎうけ討り計多き先陣城体を即秀政が又百人と擧ぐ大は
打出の浪もせし合つた在馬女也もせし居城が又百人の其中二百余
人を在馬女は備へ嚙と喚て突りうけを削務を破り其是のちんて
我の城を去り敵も小勢とつたなりしに在馬女が勇威は打崩れ三丁
計遊うらる此時在馬女が出立に在馬女は赤を威し又うらる體と着

白浪星の塊の緒を去り天麻毛とつて護足はまき磯の鞍を在馬女
の尻にのせ立計の先は深にけはの練画持時永徳が画し雲龍の白
綾の陣羽織は細の淫歩と體の上より被さ追ひしに我ひくは突
光をがれむ勇士とつと皆武者振を賞與せり城体を即味方と
下知し敵は傷り二百計を引包んで切崩せし自ら馬を去り先は
極が軍勢又りりしに圍を解つて突来り在馬女等と見く完介と知
やし三敵の振殺る光善が美助の槍先真途の去着よ交て見く強
十文軍の槍打ちり村雲三つら大勢の中(母)と叫んで馳入る荒本重虎
上野村三宅を首に必死と喚も在馬女の勇士得物くを返して西
向り南へ退ひ在馬女切也をびりし討計敵ひしは城が軍勢討り者三
百人圍守の情を備を以て迎うらる在馬女は門を出て味方と見

且敵寇の我に悉く討記し今なる者十六騎をどめりしに例する石に
 腰あけ家とて討記しと云や又切接て坂中へ入らばしやと暫く思案を
 せしに石の石に激を極ぐ軍勢後陣の石角又即九清門を勢と合せ
 雲霧障りて推寄て後寄る九馬女が勢をあらははしと云や
 九馬女あつて笑ひこい様う石の敵の形勢を並に勢をいひて三
 川の石連をせしまれば中と大馬女あつて槍を後て突まると九馬女が後
 よりあつてと云物と云又右余の大男実も烈く我にと云と云
 右の大神を扱も二三回ちぎれ無に取て大馬女あつて其年は二十六
 と云と云衆皆いよと云と云衆眼大に怒れ軍運はと云と云のま
 六又余の胆を力と云と云と云のれ九馬女をうきと云と云を撞斗の
 大馬女と云と云と云日向と云及丹及征伐の時保月の城は赤安懸右清門

を討記し林守は即武俊と我の今月己君追後のおけと云討記と
 るぞ武士の女に力と云と云は強ん者後の世の物語りにせよ死せん
 若し阿摩の藤は我名を傳ふまればと時を力と云と云を扱と云
 たると云二里のまると云城を角が軍兵と云と云け勢いと云と云と云
 して月と云る小いと云と云若者二十余人と云物と云と云敵の形勢と云
 いで討記と云るをい備へんと云と云を並に合せと云と云と云に
 即得と云と云と云合せ右に切と云九龍と云勇威衆衆と云と云と云
 運と云るの電光のごとく人を討と云と云の崩と云と云と云と云
 小斬と云角繩と云排いんと云と云歩妙と云と云と云と云と云と云と云
 人確と云はと云と云三人又人お般と云と云を亂と云と云と云と云と云
 羽が力と云と云と云と云勝と云と云と云一人は龍と云と云と云と云と云と云

真蹟言四篇卷五

十五

真言宗四門卷五



龍馬友
馬を名て
湖あり
國

真言宗四門卷五

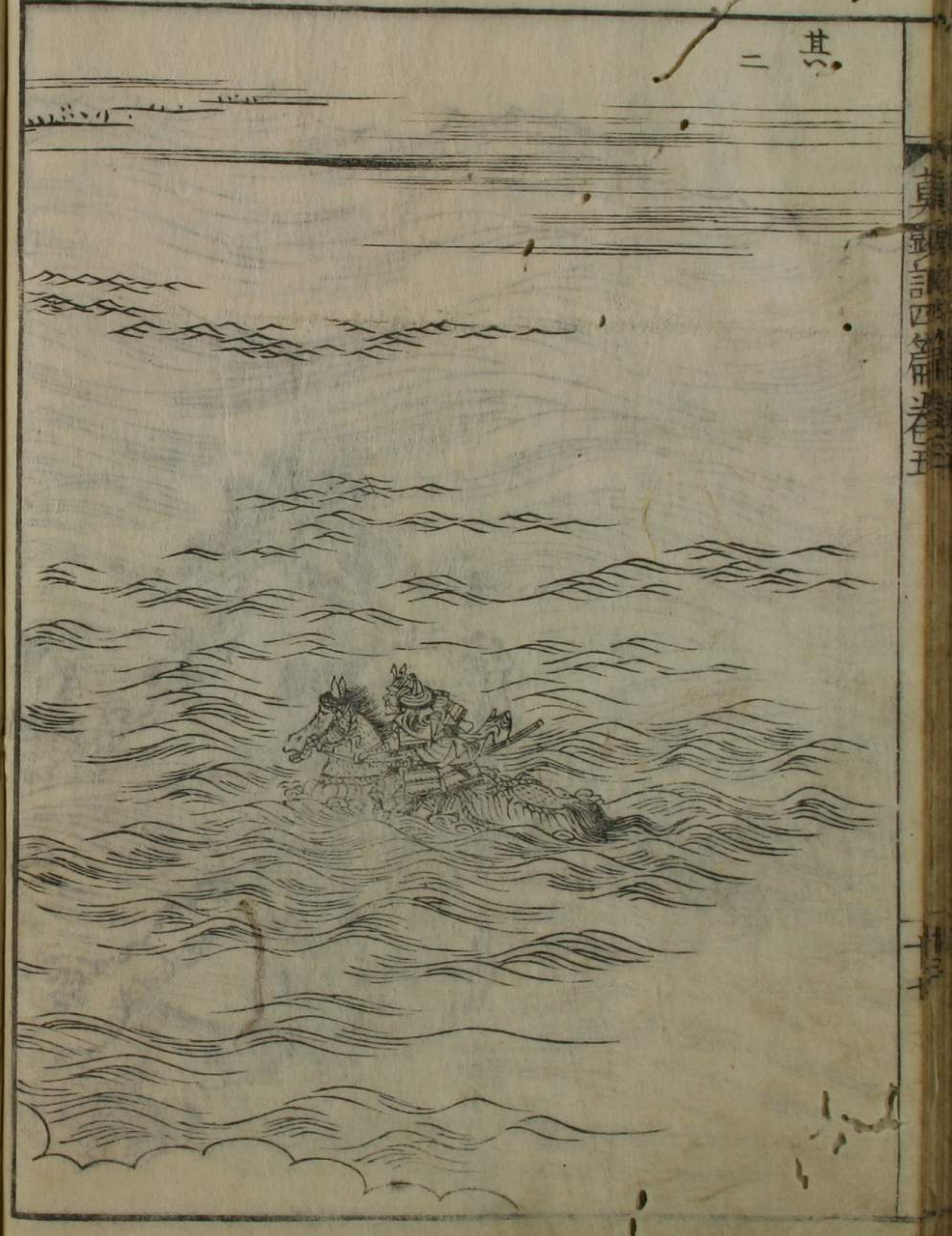


東海道四州卷五



其二

東海道四州卷五



一曰は龍を三見んべしとありて迎うりたりすに即りきては久せと云後
又遊る歌を七八人お例し其を刀打捨あるはく歌と二人引捕へ勇士の
討死をたふやとて湖水の中へ飛令く後其名を打出の浪は妙
くろい思はしうりしむとまかり

左馬次馬而涉湖水

左馬次先まの林に即り討死を見てはいと大割の者多と歎息し
味方を刃に傷え十に又跡皆深き赤心を蒙生ね命き若くする
し先ま候を流し海軍皆深き深き此始よりて至はの契
約をたぐととも討死遂に忠信義勇の世にわたりて
心よく討死をば三途の川を渡りもよみ引連て渡るべきをき
くと勇まの今とをたを杖よまきく至通りし痛みの兵士は及

ぶれを後三舟の膝にらむに後の世も形このあり死出の合戦急ぐ
ぶして偃るるを刀曲くは槍を踏破し勢い込で刃をたれは左馬次心
をひ三尺又すのち方ま向は指し堀を角が教を誘の軍兵は二文字
と切てうらぬ歌の大勢に方より五回と望まうけて討死はも願の後率
一人も石を討死し名を大津の浪に止せり左馬次今いそとこの
飛降りて何とせん云のおく集り堀が二子又百人の其中と抑つと
喚ひて只一騎利刀の竹を刻ぐと只一筋は糸入り歌の兵士蹄は
掛られはらぬらに忽ち活の死人を獲つと糸ぬけて二鞭は躍三丈
湖水の中へ二文字は糸込り堀を南へ兵率ともあれよくと嘆り
後深小並ひまお泳めてもわたりたり左馬次一人はしも遠なる湖を渡
雲龍の羽お山にさしは鶴り武器の文を葉は馬の名は押し



夏山日...



九馬女
 唐橋
 坂本の
 入る
 園

夏山日...

毛髪をけし身下を道通とく押よせし風流とて武勇とて実よ
 武士やと教ふの軍兵二冊よよやくと譽る多武野の浪よ金
 將しいるも止ざり多り難く唐徳の浪よ素より一松の馬をよせ本
 根を懐きけりき心た日の丸を出世軍扇と用き將く暑氣と凌ぎし
 系勢は馬衣を討りしぬる妙意と急進して追奉る馬衣をよせ
 又馬衣のり志づくと歩めて坂本の町又十日寺の幕にて馬をとり
 の論と切て事の格まは格り付美をよせ出く是紙よ光武徳馬とて
 又字とよみよ教ふ格ひ付歩めて坂本の城よ入にりる光武龍電乃
 強足かれ城の中は物よ教ふんもの役なれはに教ふは強敵よ送る
 馬の令と助けに松永秀吉平藤の令と打降」とい雲泥の相遠なり

繪本右圖記に篇卷之五



